

2023年（令和5年）4月13日（木曜日）

水道産業新聞

ウォータービジネス

時流

中央設計技術研究所は昨年12月にトップが交代し、代表取締役社長に西原秀幸氏が就任した。西原氏は水道部門を中心にキャリアを重ね、「地域に寄り添う」同社の姿勢を体現し続けた技術者。本紙では、西原社長にこれまでの主な経歴を伺うとともに、今後の事業展開の考え方について、社長就任の抱負と併せてお聞きした。

就任インタビュー

■文化を継承しつつ新たな道
■見据えた変革を

まず、社長就任の抱負を伺う。西原氏は「新たな時代に適応できる変革を」という前向きな言葉が返ってきた。

「当社は昭和22年に高柳水道調査設計事務所として設立され、昭和37年に現在の社名となりました。創立以来、一貫して水道を中心とした事業を展開



中央設計技術研究所 代表取締役社長 西原 秀幸氏

開する中で、下水道、廃棄物、さらには情報システムなど業域を拡大し、平成11年にオリエンタルコンサルタンツと資本提携してからは全国展開を図っていますが、あくまでも経営理念は「地域密着型コンサルタンツ」です。私は代表取締役社長になりますが、これまでの社長が築いてきた歴史・文化を継承しながらも、変化の激しい時代の流れに適応する術を確立する必要があると考えています」

「社長に就任して社員に向けて言ったことは、社員、さらにはその家族を通じて幸せを与える最高執行責任者として取り組む」というものでした。そのためには、社員に「はたしめられる技術者、営業能力を獲得していただき、その力を発揮することで充実感と幸福感を両立できるようにしたい」と考えています。これを達成するために社則も変える覚悟で諸事業を展開したいです。部門ごとのエッセンスをライカを育てたいです」

「ひとりには限界があり、それは大都市は勿論のこと、飲水のような小規模施設に至るまで多様な業務を経営している中で幅広い提案が求められる」と自負心を覗かせるが、それは自身の技術者としての足跡にも通底するようだ。

■水道分野で多様な業務を経営
大学では土木工学を専攻したが、それは国家公務員の職に就いた父の「これから土木だ」という言葉に触発されたからだという。

「入社後、父からは、『国はつまらない、民の方が断然良い』と強く言われまして（笑）。そんな親の助言と併せて将来の進路についてはいろいろと考えましたが、当社に入社した友人、さらには当時入社した友人、さらには当時の社長の、上下水道の仕事は貴重で人にとってかけがえのないものという言葉と、トップの人な雰囲気や社風にも魅せられて、入社を決意。本社は、基本計画、実施設計、施工監理を一人でもものが基本で、自分にとってもこの経験が大きな糧になりました。当社の強みにもつながっているこの社風は技術者育成にとって有効だと自負しています」

その「一人で行った仕事」の中には、小松市の簡易水道の導入も含まれる。平成7年から9年にかけての事業で、恐らく職歴の導入を検討し着手した日本

「山間地に行くほど、住む人は減っていきますが、水源に近いので管は太い傾向にあります。これは水道システムとしての合理性に合うものではないですね。限界集落的な所に水源を求めるのではなく、人がいる所からポンプアップする方が合理的です」と課題解決に向けては発想の転換の必要性も指摘する。

課題解決への貢献が責務

充実感と幸福度の両立見据え

「上下水道の課題解決を見据えた事業展開の方向性」

「上下水道の課題解決を見据えた事業展開の方向性」